

研究成果報告書

テーマ: 異なる学習環境における中国人日本語学習者による「断り行為」の研究

慶応義塾大学大学院政策・メディア研究

田 晋秦

要旨

本研究は依頼された際の断り行為という発話行為を、親疎・力関係、及び学習者の学習環境(中国・日本)を独立変数とし、日本語母語話者、中国語母語話者、及び中国人日本語中上級レベル学習者の4グループ比較を行うものである。手法は談話完成タスク(DTC)を用い、断り行為が意味公式を単位とし、四つグループ間での比較分析を行う。本研究では日本語母語話者と中国語母語話者、中国人日本語学習者を対象とし断りのストラテジーとそこに現れる配慮意識についてポライトネス理論、異文化間語用論、中間言語語用論の観点から分析する。本研究では以下の3点を研究課題とし分析、考察する。(1)断りストラテジーにみられる日本語母語話者と中国語母語話者の類似点と相違点を明らかにし、両母語話者は断りを行う際にどのような点に気を配っているかについて考察する。(2)中国人日本語学習者にみられる断りかたの特徴と問題点を明らかにし、中国人日本語学習者に母語の影響はみられるか。また、学習環境による影響はみられるかについても検討する。(3)日中において最も多くみられたパターンで断りをされた場合、両母語話者と中国人日本語学習者はどのように感じるかを明らかにし、調査の結果を説明するために、「ポライトネス理論」、「面子」、「和」の文化論を導入して解釈していく。この分析の結果により、日中交流の場面や接触会話場面で、注意すべき事柄が明らかになり、お互いによりよく理解し合うにはどうすればよい

本研究は理論面での貢献は勿論のこと、実際の社会において避ける事のできない「断り行為」を様々な角度から明確化することで、従来の中国人日本語学習者と日本語教育に興味を持っている方に対して役に立つことを目指している。

研究目的と研究意義

本研究では、日常生活の場面を設定し、断り方側の意向、本当の意思、自然さを再現し、「断る」を通じて、言語表現の背後に潜む文化差異、意識認知などに触れることによって、より深い異文化コミュニケーションの理解が促進されることが期待している。

従来中国語母語話者による日本語習得研究には学習環境要因に着目した発話行為研究の数が少なく、また状況設定が細分化されたものがあまりなかったことから、中間言語語用論の領域においての理論的貢献も期待される。

また、日本語学習者・中国語学習者・日本と中国と交流している人に参考になれば幸いと考えている。

以上の研究意義に基づき、本研究では日本語母語話者と中国語母語話者、中国人日本語学習者を対象とし断りのストラテジーとそこに現れる配慮意識についてポライトネス理論、異文化間語用論、中間言語語用論の観点から分析する。本研究では以下の3点を研究課題とし分析、考察する。

(1)断りストラテジーにみられる日本語母語話者と中国語母語話者の類似点と相違点を明らかにし、両母語話者は断りを行う際にどのような点に気を配っているかについて考察する。

(2)中国人日本語学習者にみられる断りかたの特徴と問題点を明らかにし、中国人日本語学習者に母語の影響はみられるか。また、学習環境による影響はみられるかについても検討する。

(3)日中において最も多くみられたパターンで断りをされた場合、両母語話者と中国人日本語学習者はどのように感じるかを明らかにし、調査の結果を説明するために、「ポライトネス理論」、「面子」、「和」の文化論を導入して解釈していく。

この分析の結果により、日中交流の場面や接触会話場面で、注意すべき事柄が明らかになり、お互いによりよく理解し合うにはどうすればよいかについての示唆が得られると考える。

調査の対象者

2015年3月から2015年5月にかけて、次の四つのグループ（各30名）について調査を行った。

- ① CC:中国語母語話者、日本語を学習したことがない大学三年生、男性2名、女性28名、平均年齢22歳
- ② JJ:日本語母語話者、大学三年生、男性5名、女性25名、平均年齢22歳
- ③ CCJ:中国国内で日本語学習者、大学三年生、男性1名、女性29名、平均年齢23歳、平均日本語学習暦4年

- ④ CJ: 日本で日本語学習者、大学三年生、男性 4 名、女性 26 名、平均年齢 23 歳、平均日本語学習暦 5 年

CCJ と CJ の日本語能力は上級（日本語能力試験 1 級）、中国語を母語とする漢族である。

CC、CCJ と CJ の出身地は、黒龍江省、吉林省、北京市、遼寧省、山東省、陝西省、河南省、上海市、江蘇省、浙江省と中国各地に分散している。JJ の出身地は、北海道、長野県、千葉県、埼玉県、東京都、神奈川県、大阪市、福岡県、沖縄県である。

調査表

二種類の調査表を準備した。

まず、日本語版を作成し、日本語母語話者 2 名に、場面設定、内容の自然度などをチェックしてもらった。次に、筆者が日本版を中国版に訳して作成した。日本語版と中国語版の場面設定及び内容の自然度を確認するために、中国人日本語学習者 2 名にチェックしてもらった。日本語母語話者と中国人日本語学習者の対象者に対しては日本語版の調査表を、中国語母語話者に対しては中国語版の調査表を用いて調査を行った。

調査 1 は日本語でのアンケート、調査 2 は中国語のアンケートで、両方とも談話完成分析（DCT）を使用している。DCT は、場面（断り）、親疎関係（親しい・親しくない）、上下関係（先生・同級生・後輩）を組み合わせた全 6 場面を設定し、それぞれの場面で断りの理由を提示している状況を設定しておき、日常生活コミュニケーションの通りに対象者が自由記述に書いてもらう形である。DCT から得られた結果から、意味公式を抽出し、各意味公式の使用人数を計算する。

以下は場面の設定である

表 1 場面の設定

場面	断る相手との関係	断る理由
交流会 (場面 1)	親しい先生	翌日期末テストがある
カラオケ (場面 2)	親しくない先生	門限がある
食事	親しい同級生	家族と家での食事先約

(場面3)		
勉強会 (場面4)	親しくない同級生	歯医者との先約
旅行 (場面5)	親しい後輩	恋人との先約
パーティー (場面6)	親しくない後輩	恋人の誕生日

意味公式は Beebe, takahashi and Uliss-Weltz(1900)、生駒・志村(1993)、藤森(1993)、伊藤(2003)などで発話を分析している意味公式の単位をとして使用する。本論文では藤森(1993)に修正した意味公式を使用した。表1、意味公式の分類を提示する。

アンケートの中で出現した文は例文として挙げ、意味公式の分類を示す。また、調査表は別添資料として示す。

例1:

ごめんなさい、明日テストがあるので、
詫び 理由

行けません。また機会にお願いします。
結論 関係維持

例2:

不好意思，明天我有考试呢！
詫び 理由

要不然改天吧！
提案

調査の手順

JJ、CJJ、CJは日本語版の調査表に記入してもらい、状況はすべて日本で行える事で、設定した会話の相手も日本人とし、日本語で回答してもらった。CC

は中国語版の調査表に記入してもらって、状況はすべて中国のできる事で、設定した会話の相手も中国人とし、中国語で回答してもらった。

結果と考察について

まず、日本語母語話者は断る時に、親疎関係と上限関係を問わず、「詫び」、「理由」の意味公式を多用する。親疎関係の変化につれて、意味公式の選択した個数と項目はあまり差が激しくない。上下関係から見ると、親疎とも目上に対して、「詫び」＋「共感」＋「理由」＋「結論」＋「再詫び」のパターンが多い。同輩には、「詫び」＋「理由」＋「結論」＋「関係維持」のパターンが多い。目下には、「詫び」＋「理由」＋「ためらい」＋「関係維持」のパターンが多い。共通点では、日本語母語話者は最初から「詫び」が多く、相手のポジティブ・フェイスを守る。目上としては「共感」と「再詫び」を使い、同輩には「関係維持」と目下には「ためらい」と「関係維持」を使用しては相手のフェイスを配慮する。

また、中国語母語話者は場面では親疎関係・上下関係により異なっていた。

まとめると、意味公式を並んでいるパターンは以下のように：

目上親：「感謝」＋「共感」＋「理由」＋「理解を求める」

目上疎：「感謝」＋「共感」＋「理由」＋「理解を求める」＋「結論」＋「詫び」

同輩親：「共感」＋「理由」＋「理解を求める」＋「関係維持」

同輩疎：「共感」＋「理由」＋「理解を求める」＋「詫び」＋「関係維持」

目下親：「共感」＋「理由」＋「理解を求める」＋「結論」＋「関係維持」

目下疎：「共感」＋「理由」＋「理解を求める」＋「結論」＋「関係維持」＋「詫び」

まず、親疎関係から見ると、親疎の変化につれて、意味公式の使用が異なっている。なるべく多い意味公式を使用すれば、相手のフェイスの配慮を体現する。目上と同輩は親より疎のほうが「詫び」を使用しているため、相手の心理距離感を置きながら、礼儀性と丁寧性を表している。

次に、上下関係から見えていく。全体から見ると、意味公式の使用はあまり変化がない。ただし、目上と同輩を比べると、同輩は「感謝」を使用せずに、「維持関係」を使用する傾向がある。もし同輩に「感謝」を使用すれば、相手の距離感を与えて、悪い印象を与えてしまうからである。同輩と目下を比べると、目下は「結論」の使用を増加した。以上から、目上に尊敬する敬意を払って、目下にはっきり結論を言っても詳しい理由も説明している。目下に疎のほうが「共感」を使用して、相手のポジティブ・フェイスを守るための方法であるととれる。

中国にいる日本語学習者では、親疎関係・上下関係により異なっていた。多くパターンは以下のように示す。

目上親：「感謝」＋「共感」＋「理由」＋「理解を求める」＋「詫び」
目上疎：「感謝」＋「共感」＋「理由」＋「理解を求める」＋「ためらい」
＋「詫び」
同輩親：「共感」＋「理由」＋「結論」＋「詫び」
同輩疎：「共感」＋「理由」＋「結論」＋「詫び」
目下親：「理由」＋「ためらい」＋「関係維持」＋「詫び」
目下疎：「共感」＋「理由」＋「理解を求める」＋「結論」＋「ためらい」
＋「詫び」

中国にいる日本語母語話者と親疎・上下関係とも、詫び点で共通しており、相手のフェイスに配慮するよう見えるが、日本語母語話者よりは謝罪する人の数が少なかった。また、詫びは後ろ置きの場合も多い。日本語学習者は、目上に対して「感謝」と同輩「共感」において母語からの語用論的転移が見られたが、その中でも中国国内にいる日本語学習者は親しい目上に過剰に共感を示す、条件提示をするなどの問題点が浮上した。

日本にいる日本語学習者では、
目上親疎とも：「詫び」＋「共感」＋「理由」＋「結論」
同輩親疎とも：「詫び」＋「共感」＋「理由」＋「結論」＋「関係維持」
目下親疎とも：「詫び」＋「理由」＋「ためらい」＋「関係維持」

日本にいる日本語学習者は、特に同輩と目下の場合に、相手との関係を重要視し、「共感」を過剰使用していることが問題になる。外国語環境にいる日本語学習者と目標環境にいる日本語学習者は配慮するフェイスが異なっていた。

日本語学習者は学習環境の差異により、断りについて断るかたを身につける程度は異なっている。日本語学習者、会話教科書の影響を受けて、化石化になってしまう。これらの例文を通じて、意味公式として「詫び」、「理由」、「結論」、「ためらい」が多く使用されていることが分かった。それに、これらの「断り」例文には、文法的には間違いなくとも、現在日本人の日常生活コミュニケーションの視点から見ると不自然な「断り」の例も見られた。日本にいる日本語学習者は日本人あまり日本語母語話者と接触せずに、教科書の例文を参考して、ミスが生じやすいと考える。以上の分析により、教科書における「断り」に関する記載の特徴や問題点が見られた。日本語学習者にはこのような教科書を通して、「ためらい」や「詫び」などの意味公式がより深く印象に残してしまい、日本語の婉曲的な「断り」ストラテジーを習得することが難しくなるのではないかと考えている。また、日本のドラマと漫画をよんでいるが、日本人の断りかたについて重視しているため、断りかたの思想様式は中国語母語話者に近いと思われる。